プロローグ

ひとえに渓流釣りと関わり早くも４０有余年、その内でもテンカラ釣りだけで３７年を費やしてしまっています。年数だけ永ければ値打ちが上がるというものでもないでしょうが、少なくとも年間５～６０日ほど川へ足を運び、その都度、試行錯誤を繰り返してきたからにはそれなりの何かを物にしているはずです。今このプロローグを書くにあたって、これまでの幾多のシーンやエピソードをあらためて思い起こしています。

概ね、ひとつの物事に取り組んで３年も経過すると、どうにかこうにか格好になるものであります。私のテンカラについても、初めの第１段階としての３年間は基本みたいなもので終わったものの、それを足場に次の段階へ、さらに次へと経験を重ねていくことで、安定した釣果が得られるようになってきました。ですからテンカラ釣りを始めて、第１段階の釣果よりも次の第２段階の釣果の方が低いと言うことがあっても、一向に気にすることはありません。

それは理屈や匹数で言い表せないところの経験という財産を体得しているからです。また初心者が熟練者といわれる人より多く釣るなどということもありますが、そのことは偶然の出来事であり、一向に気づかうこともありません。自分が昔に使っていて今は忘れてしまった技を、初心者は偶然に使ったというだけです。例えば逆引き、素朴な毛ばり、魚への接近、例を挙げるとまだまだあると思いますが、これまで培ってきた技を、初心者が思い起こさせてくれたのだと考え、黙って有難く拝見しているのが得策と思います。

さて、前置きが長くなりましたが、京都北山テンカラ会の会員たちと共に苦労し培った経験をもとに、蓄積された技の結集を惜しみなく述べさせて頂きたいと思います。是非、参考にされて自分流の新しい形を見つけ、掴んでくださることを期待します。

京都北山テンカラ会　冨士弘道

タックル

竿を選ぶ

●長さ・３．３㍍　３．６㍍　３．９㍍

長さ的には上記の範囲で十分に事足りると思われるが、使用する際の基本となる竿の長さは、渓（川）の大きさや規模により左右されるものと考えられるが、一般的には３．６㍍あたりが無難なところ、あるいはただ単に自分が好みとする渓の規模にて竿の長さを決定しても間違いないと思っている。

しかし、藪沢的なところで使う場合には、ラインの長さは周りの障害物に対応して短くなり、合わせて竿も短くなるのは当然と云わなければならない。しかし、ラインと竿との支持点を高くするほうが有利に働くため、許される範囲にて長い竿が有利になることは確かだ。また、わたしの経験上、継ぎ本数が少ない方が良く（一般的には仕舞い寸法９本継ぎ程度）調子の持続性も上がるので、大川などは携行の不便さを考えなくても済むのでこれをお勧めしたい。

●調子　７：３調子・６：４調子・５：５調子

各長さとも竿のモーメント（トルク）が違うので一概には言えないところではあるが、釣法により使い分けることも納得のいくテンカラを楽しむための重要な竿の選択要素となる。

例えば、大川的な渓にて誘い釣りに重点をおく手法なら、胴に乗る５：５調子の竿が合い（長いラインを使う場合でも振込み易い）小規模河川で、ライン振幅の取りづらいような渓では６：４調子、または７：３調子（６：４調子で事足りる）が適している。また「普通毛ばり」での「捨てバリ釣法」を志す人には６：４調子「逆さ毛ばり」などで、誘い釣りを志す人には柔らかめの５：５調子の竿を勧めている。

ライン

振込み易さだけを考えるなら、宇崎日新から発売のより糸「パーフェクトラインやＰ２ライン又はＳＰライン」を勧め、ラインの軽さからくる振込み後の利点等を考えるならフロロカーボン「単糸」のラインが適している。これら両者の利点を併せ持つものとして、ＤＡＮ社から発売のフロロカーボン単糸を加工した「必釣ライン」を勧める。

●「より糸」と「単糸」の利点及び欠点

より糸の長所を述べれば、総重量の事は別にしても飛びやすく、従って操りやすいということが云えるので初・中級者あたりにお勧めです。

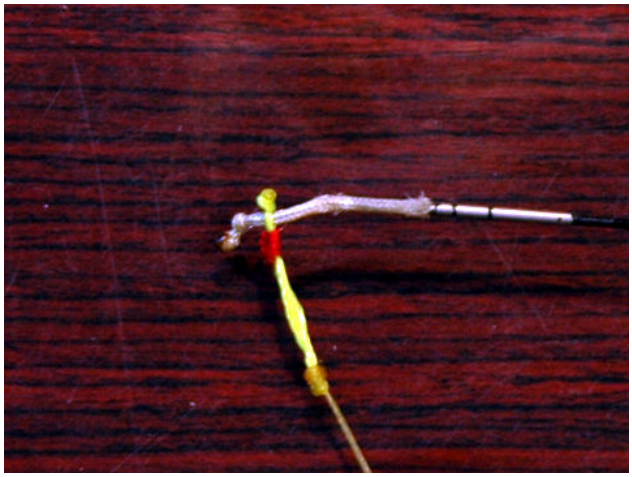
単糸の長所は、操るには少々骨が折れるが、クラッシュしたとき修復が容易で蜘蛛の糸など付着しても容易に除去できる点など、時期や場所によって捨てがたいものがある。

より糸の短所　障害物などに毛ばりを掛け、仕方なくハリスを切るような時など、クラッシュ状態になる（この時は、前後に２～３回振ってやれば比較的簡単に直る）

一番難儀する問題として、ラインを水中に浸けて流した時、水流に影響されやすく

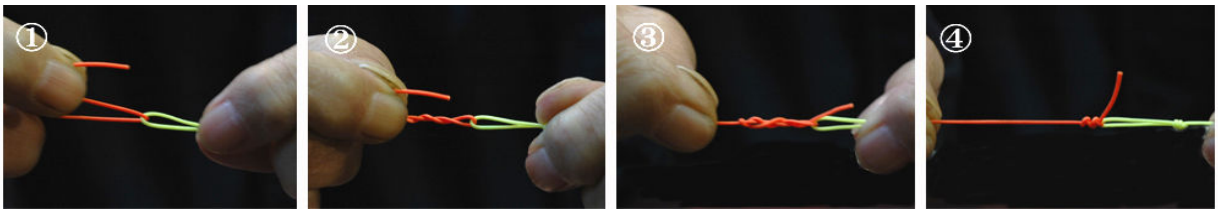
なるので「三角形の保持」が出来ないような長いラインを使うときなど不向きな面も生じてくる（５㍍以上のライン使用時）。
単糸の短所　なんと言っても「振り込みづらい」ということに尽きるのではないか？・・勿論、修練を積み重ねる事で、ある程度はカバーできる問題ではあるが。
●ラインの長さ
　自分の好みの渓によりラインの長さは決定される。例えば、大川を好む人なら６㍍程度またはそれ以上の長いライン、藪沢的な渓相なら３㍍前後、一般的なラインの長さはと問われると「竿の長さと同じ程度」つまり３．３～３．６㍍ぐらいと云いたい。
　ところで、遠くを釣りたいと云う思いから長いラインを使う人が増えたことも事実ではあるが、下流から上流へと釣り上がる基本的な渓流釣りでは、せいぜい５㍍くらいのラインがあれば十分だと思われる（私は大川において４．５㍍を多用）。この長さなら「より糸」「単糸」を問わず不自由なく使いこなせるからだ。
●ハリスの長さと素材

　ナイロン（比重１．１４釣り専用素材）ハリスの使用品には少々高価でも品質の安定したハリス用ナイロンを使用するほうが得策であるが、ハリスの柔らかさのみを追及すればチジレ（キンク）も生じやすく不都合さも生じてくる。
　ハリスの長さも使うラインや毛ばりサイズ、または釣りスタイルにより長・短と使い分け、より糸なら（宇崎日新ＳＰ・パーフェクトライン）１３０㌢前後。必釣ラインには９０㌢前後が適している。なお、各人が使用する竿の調子や、振込みスピードの違いなどにより多少の長短は生じてくる。
素材的には、現段階は結束度に問題があると思われるハリス用フロロカーボンはお勧めしていない。
　ちなみに、ハリスの太さは０．８～１．２号あたり、イワナ系統を狙う時には１．２号と少し太めと使い分ける。
仕掛け関係



●竿とラインの連結
　一日に何千回と無く振り込むテンカラ釣りでは、穂先にある「へび口」とラインの連結には苦労し、結果写真のような装着方法にて解消、今のところ知る限り問題は起こっていないし、今後ともこの傾向になると思う。
（写真参照）
●ラインとハリスの連結
　ラインとハリスとの連結には、迅速

かつ確実なサルカン結び（クリンチノットのシングル）で対応している。この方法だとハリスの取替えも早く、また、大きくても３０㌢前後の魚とのやりとりにおいて十分な連結強度も確保でき安心してテンカラに取りくめる。（写真参照）



①　ラインの先端にあるわっかにハリスを通しＺ型に持つ
②　そのままの状態を維持しながら、ラインを左親指と人差し指でこよりを撚るように６～７回まわしラインとハリスの間にできた空間に差込む
③　この写真では理解しやすいようにリリアンを使っているので④のようにはコブ状にはなりにくいが、ハリスだと簡単にできる
④　ハリスの先端を５㍉ほど覗かせて締め込み、爪で押さえ込んで念を入れるとよい

●ハリスと毛ばりの連結

普通使用している環付きハリとハリスの連結には、経験上「ユニノット」（３回通し）が適している。

★毛バリとハリス、ラインとハリスの結束は結束部をツバで濡らしてから締めこむこと（摩擦熱による強度低下、縮れの防止になる）

●仕掛け巻き（写真参照）

渓へ入れば早く竿を出したいという衝動にかられるのは誰しものことだろう。願わくば現地に入ってから慌てて仕掛けを作るのではなく、前もって作り上げておくことが、ことテンカラ釣りにかかわらず基本的な習慣としていただきたい。

服装関係および持ち物

周りの景色に同化するような服装を勧める。

●帽子

カーキ色等。黒色はお勧めできない（蜂対策のため、服装関係も同じことが言える）帽子の一般的な形状は、キャップ形式が手ごろなところではあるが、ハット形式で撥水機能を有するものも突然の雨対策としては有効、しかしブッシュ等にひさしが引っ掛かることもあるので使いづらいところでもある。

●足元

昔は京都の友禅関係の職人が使っていた、俗に言う「ばか長」という代物でゴム製長靴の股まであるものであった。今ではそれが進化して底に滑り止めのフェルトを施し、また胸までいたるチェストハイまで品は揃っている。

テンカラ釣りで使用するのは腰上までのウエストハイまたはヒップブーツ（股で留まる長さ）程度で、それ以上の長さは必要としないのが一般的である。予算的に許さ

れるなら透湿性をもたせた素材で出来た製品を選ぶのがよい。
透湿性があるからといっても夏場では結構暑くまた蒸れるので、６月頃からはウエディングシューズにスパッツのいでたちを勧める。
●ズボン
　第一に収縮性を考慮、夏場には速乾性のある素材のズボンを選択するよう。また、山岳渓流のイワナ狙いならばスパッツ併用にて速乾性のあるものを選択してほしい、ただ薄手の素材や障害物に引っ掛けて、繊維が飛び出すような素材や摩擦に弱い素材は避けたほうが良い。ところで、私が考案したスパッツも山岳渓流のテンカラには面白いと思うのでお試しください。
●上着
　必ず長袖のものを着用すること。下着はランニングシャツ・Ｔシャツ程度で十分であるが、時として夏場でも山岳渓流を目指す場合には、気候の急変するような場合もあるので、それ相応の雨具兼防寒具は持参したいものである。
●釣り小物
　その他小物関係（雨具兼防寒具・ヘッドランプ・予備のライター・補助ザイル（２０㍍程度）・非常食・コッフェル・バーナー）・手袋・藪こぎ時などに重宝する（リュックに忍ばせておく）

　以上の持ち物は入渓場所に応じて全てリックに収納し持ち歩きたいものである。併せてズック靴も持参する事をお勧めしたい（脱渓後道路や山道を歩く時など有効）以上、専用リュックとして３０㍑程度のものを持つこと（デイパック状のチャックで締めるものは不向き、必ず紐で締め込む形状をお勧めする）
ポシェット（黒系統色）
　テンカラ釣りの用具は比較的少なくてすむことからベストも便利ではあるが胸部に収納ポケットが集中するものが多く、へつりや高巻き時に視界を妨げ足元が見づらいなど危機感を覚えることが
多々ある。また気温の上昇とともに長袖の上にベストでは暑く不快感を憶える。そこで私はポシェットを専用ベルトに固定して使っている。使わないときは邪魔にならない場所（横・背面）へ移動するようにしておけばよい。歳をとり視力が低下するとハリスなどの細いものが見づらくなるので、ポシェットにはハリスなどが見やすいよう背景を暗くするために黒色のものを勧める。また偏光メガネケースも装着しておきたいものだ。

最近、時計を腕に持たない人が増え、時刻を知るには携帯電話で用が足りるからであろう、ところが川へ入ってつい携帯電話を車に置き忘れたと言う場合が多々生じる。そこで私はポシェットに時計を装着するようにしている。

（写真参照）

●ポシェットの中身

毛バリ（普通毛バリ・逆さ毛バリ・順毛バリ）予備ライン（渓相に合わせて）予備ハリス（０．８号・１．０号・１．２号程度）虫除け（スプレー容器入りハッカ油）修理用具（瞬間接着剤新品）へびロ（リリヤン）など容器に入れ収納しておくこと。季節によっては蜘蛛の糸を除去するのに便利な毛抜きなど。●その他の携行品

里川での釣行には必要性を感じないが、入渓場所によっては非常食程度のものは携行する習慣をつけるほうがよい。

私のリュックにはその他、熊よけ鈴・ヘッドランプ（予備の専用電池）ライター・笛などを常備・携行するようにしている。

●鉈（刃物）

主にブッシュを振り払うためのものだから片刃よりも両刃のほうが利便性は増す。また容易に抜き差しの利く木製鞘の鉈が適し、紐には６㍉程度３本編み（クレモナロープ）のものを使用するのがよい。いざという時など緊急の場合、解いて使用することも可能だ。

余談ではあるが、刃物の手入れが出来ない人は持つべきでないと言うのが私の持論であるが・・・。

毛バリ

毛バリ３態

毛バリの形態を決定するのは、ステージ（舞台）の違いで選ぶことで間違いは無いと思う。こと『テンカラ釣り』と言う技法に拘るなら、ＦＦのようにリアルなイミテーションにとらわれず、水中または水面下（５～１０㌢程度）での毛ばりの動きに的を絞った考え方で取り組むべきだと思う。何れにしても、魚に対しての刺激・興味をいかに与えるかだから、形態的（イミテーション）なもので訴えるのか、それとも動的なものに対しての表現力として訴えるのかの目標（自分の釣りスタイル）を明確に持つべきである。

しかし、毛バリは「こうだ！」とか、そんな毛バリは「ダメだ！」とは断定する事は禁物である。かえって、あちらこちらを向いたハックルや太い胴のほうが効果的な場合があるような気もする。これは私の経験上から導き出した戯言であるが・・・。ただし、微妙な振込みを要求される場面において、毛バリの空気抵抗が一定せず、操作しづらい面があることも事実であるから、バランスよく巻かれたものを使用するよう心がけたい。

毛ばりを選定するにあたり、自己診断をしておく必要もありそうだ。つまり本人が

どのような性格の持ち主かである。例えになるかどうか疑問だが、男性と女性では自ずとつりスタイルは異なっているもので、男性はめまぐるしく変わる渓流の変化に興味をしめし、テンカラ（渓流つり）は足で稼ぐものだとばかり、次々と移動していく性分を持ち合わせている人が多いような気がする。一方、女性はじっくりポイントと向き合いながら構えて釣る人が多い。勿論、女性的な男性も、またその逆もあるので一概に断定することは出来ないのだが・・・。貴方はどのスタイルでしょうか？

●「普通毛バリ」（写真）

一般的にハックルは硬いハックルで水面上にて表面張力が利きやすい形状に仕上げる。しかし、元来日本の渓流にてのテンカラ釣りは水面上を流すのではなく、水面下５～１０㌢沈めて流すのが普通である。従って、硬いハックルに拘ることなく、臨機応変に適当な羽根を使用しても間違いではない。ただ普通毛ばりに長い毛をハックルとして巻き込む（使用）のは無理なので「雄鳥」「雌鳥」を問わず、最初から適当な長さの毛なみを選択すること。

●「逆さ毛バリ」（写真）

テンカラ釣りには、古くから「逆さ神話」があるようだが、私はあえて拘らないようし、水深があり水量や流れが速い場所などに使うようにしている。

使用するハックルには、「雌鳥」で少し柔らかめの羽根を選ぶとよい。適度な柔らかさがあれば長い羽根でも先端だけを好みの長さに出して巻くこともできるので重宝する。

●「順毛バリ」（写真）

後でも述べているように、誰しもが使用する毛バリ（形状）のものでは魚が学習してしまう。従って「動き」に重きをおいて考え出したのがこの毛ばりである。使用する羽根は、雄・雌を問わずともよい。

毛バリ巻きの道具（用品）

昔は今のように機能的に優れたバイス（万力）もなく、器用にも指に挟んで巻いていたものだ。しかし、ＦＦには機能的に優れ便利な用具が多々あって、これを使わない手はない。最低限度次に記したものは準備したほうが得策だろう。また、

入手には経験者・上級者の助言にたよることをお勧めする。ただ高価だから良いとは言えないことをこころしておいて貰いたい。

私が現在使用しているものを参考に入手されたら良いと思われるので列記してみた。

●バイス（写真）

リーガルバイス・ダイナキング（アメリカ製）

インド製の安価なバイスも釣具店には売っているがジョーなどの耐久性が低く数年で使い物にならなくなるので、多少高価ではあるが耐久性に優れた上記のバイスを勧めたい。

●ボビンホルダー（写真）

予算的に許される人は、各色別に揃えたいものだ。

選定にあたって注意することは、先の管部分と針金部分の結合部には差し込みスタイルになっていない一体型のものを勧めたい。

●瞬間接着剤またはマニキュァ液（透明）

私が使う毛バリのフィニッシュには、ほとんど使うことはないが、小さめの毛ばりやイワナ用毛バリには瞬間接着剤を欠かすことはできない。

●ハサミ

日本製のものでも、３，０００円程度出せばそこそこの物が手に入る

●フィニッシャー（写真）

外国で考案されたフィニッシャがなくても、一般的な毛バリを巻くテンカラにおいてはさほど不自由は感じないが、あったほうが重宝する。

●ハックルプライヤ（写真）

ハックルをつまむ道具で、これも先述したようなものだが、使用頻度は高い。

●ハリのサイズ・色

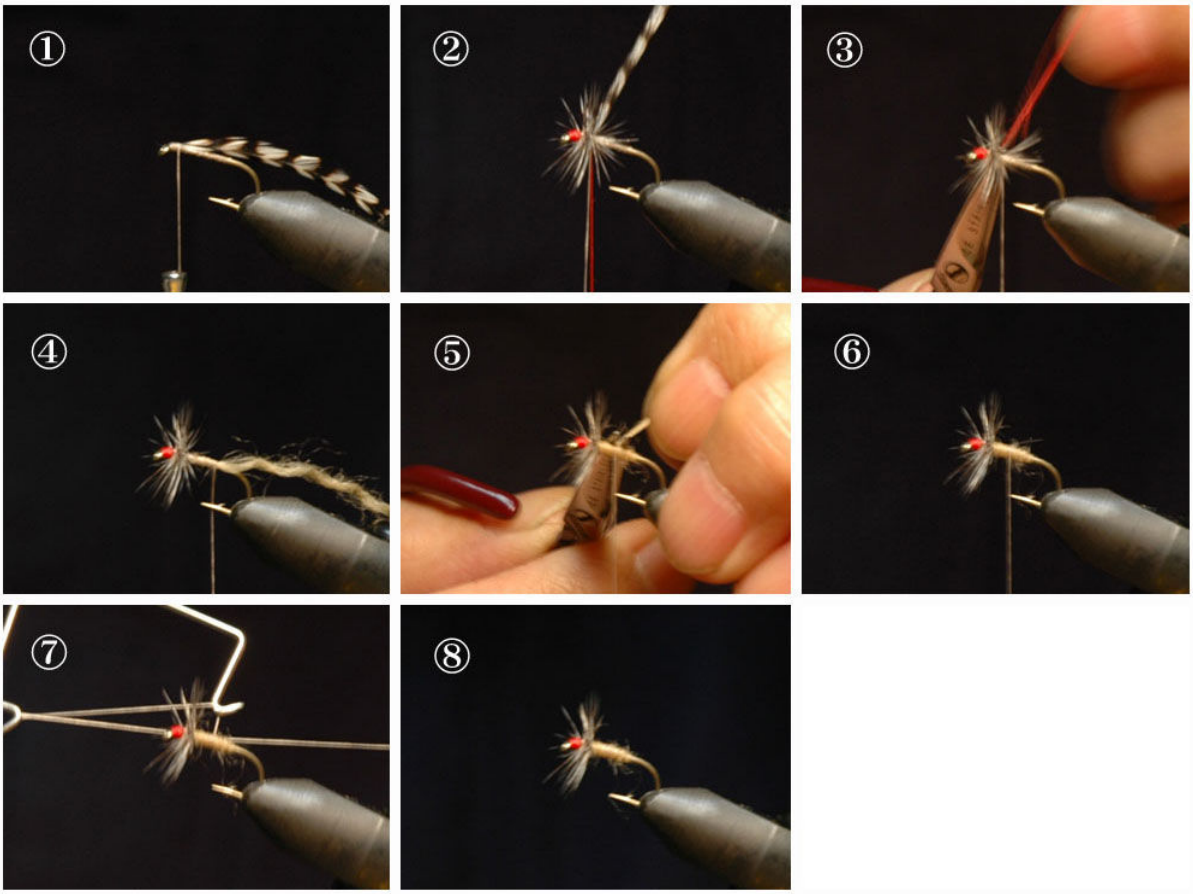
テンカラ釣りで一般的に使用しているのは＃１２号前後、大場所には大きい毛バリ（大きい魚）＃１０号程度またはゲープの広めな毛バリ、小場所などでゆったりした（静かな）振込み（プレゼンテーション）がのぞまれる場合（比較的小型魚が多い）、

＃１４号より小ばりが適している。
　イワナ系統（ニジマス）には黒色（胴）の毛ばりでサイズも大きめがアピール力もあり有利に働くようだ。

●材料
　モノコード３／０（クリーム・赤・黒・その他）・毛糸（解して使う）・孔雀の羽・コックサドル又はケープ・ヘンフェザント（高麗キジの手羽）・パートリッジなど（写真）ハリ・ＴＭＣ　１０２Ｙ＃１１～１７　マルトＣ４６ＦＷ＃１２～１４

毛バリの巻き方

● 普通毛バリ



①・②　羽根の根元側を止め、合わせてヘッド部分を自分の好みの色（私は赤を好む）で仕上げる。このとき、頭部分が長くならないように注意すること。

③　羽根をハックルプライヤーで摘み、時計方向に３回ほど巻き（巻き込みは全てが同一方向）、スレッドで仮止め。（写真でも分かるように、余分なファイバーが出ているが最後に巻き込んでしまうので問題としない）

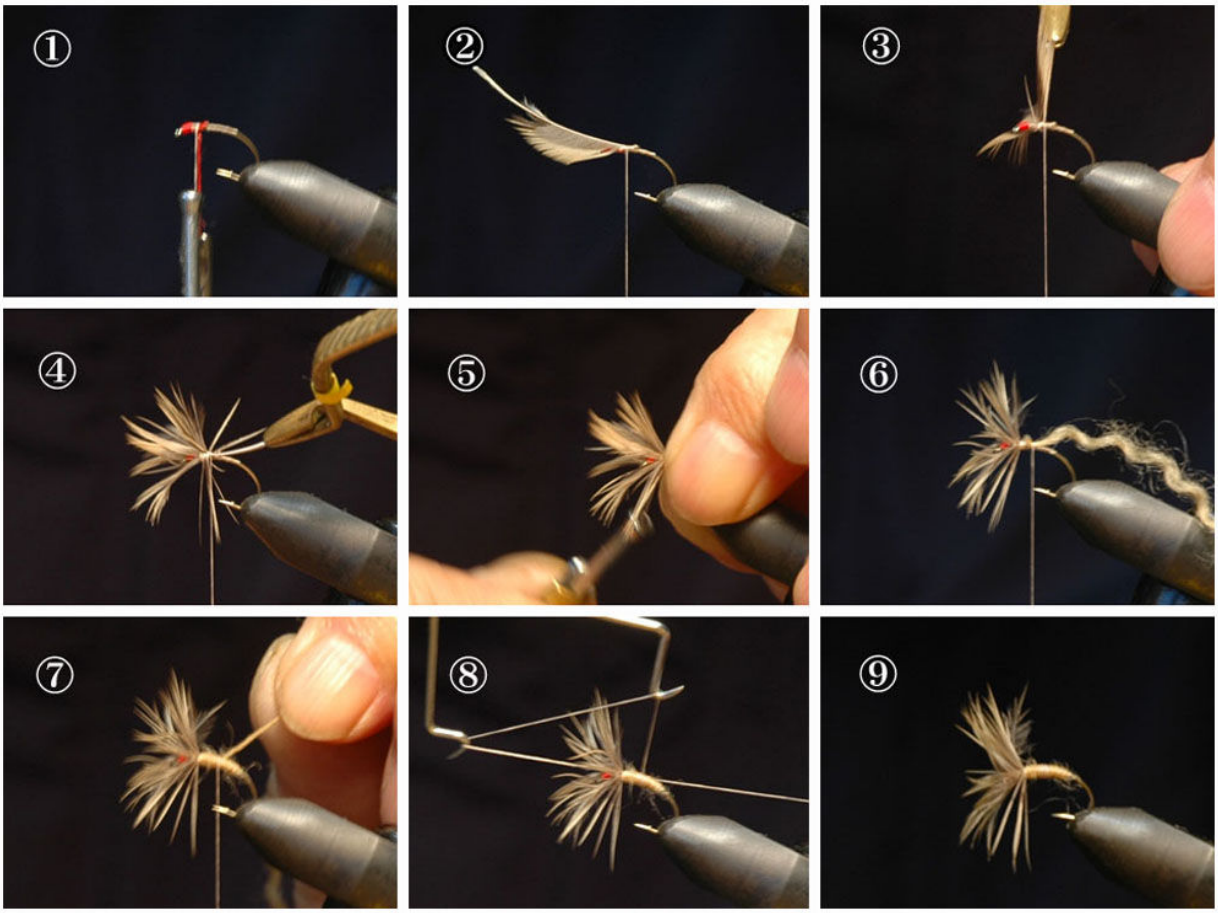
④　胴部分を作る、私は４本組みの細毛糸を解いてその一本を使っている。（胴の太さ・毛バリのサイズなどにより使う太さは異なるが、太くしたいときには巻き回

数を多くして対応、この方が美しく仕上がる）

⑤⑥　胴部分のフィニッシュは、写真のような部分で終わるようにし、３回ほどスレッドで止める。

⑦　これでほとんど完成であるが、⑥で巻いた部分あたりをフィニッシャにて補強し終了する。（スレッドの色合いは胴部分と同色を使うと美しく仕上がる）

●逆さ毛バリ



①　ベント側（フック側）を摘みセットしヘッド（頭）を作る。最初、頭をつくる要領にて下巻きをする、頭の先端に当たるところに赤糸にてヘッドを作る（この赤糸が思わぬ効力を発揮する）ヘッド部分はせいぜい２ミリ程度に留める（長くするとバランスが悪くなる）

②　ヘンフェザントの部位から適当な羽根を採取し羽根をセット（羽根の裏側が上側になるように）

③④羽根の軸をハックルプライヤにて固定し、なるべく重ならないように注意しながら巻く（時計方向）

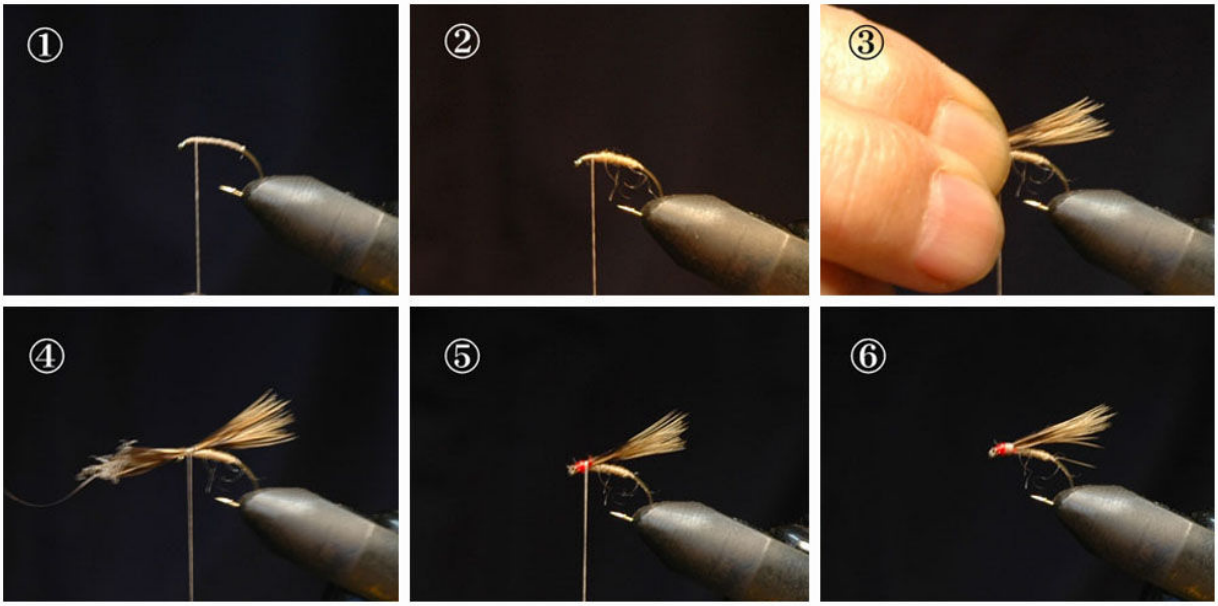
⑤　羽根を巻き終えたらスレッド（下巻き糸）にて仮止め。仮止より左側へはみ出た羽根は、右へ折り返して仮止め。きれいな逆さ状に羽根を整えながらスレッドにて巻き締める。

⑥⑦毛糸とスレッドを一緒にテールまで１往復巻き、胴部分を作りスレッドで仮止めをする

⑧　フィニッシャを用い毛糸をスレッドで固定する。解ける心配がある人はセメント

で止めるようにすれば安心だ。（イワナ・ニジマス系統の毛バリには瞬間接着剤を用いる）

● 順毛バリ　逆さ毛バリと差異はないので上の巻き順・要領に従い進行すればよいが、一応列記しておく。



① 下巻き作業
② 適当な毛糸などで胴部分をつくる
③ 普段使わないような毛足の長い羽根をもいでハリに沿わせる
④ 写真⑥の長さくらいになるよう沿わせモノコードで巻き締め、余った部分は切る
⑤ 頭部を作りフィニッシャを用いスレッドで固定する。解ける心配がある人はセメントで止めるようにすれば安心だ。（イワナ・ニジマス系統の毛バリには瞬間接着剤）
⑥ 完成写真

★写真撮影は対面方向から行っているので時計方向のつもりで見てほしい

振込み

基本的な振込み方

「竿の弾力をいかに効率よく使うか」にかかる問題であるから、竿の種類（弾力・調子）による違いなども考慮し臨むべきである。

言葉で表すのには難しい面もあるが、上記したように竿の弾力を旨く使うことであるから、竿の弾力は目標へ向かって滑らかに出せなければ効率の良い振込みは出来ないと言うことを念頭において挑むべきだ。つまり、力みすぎたり方向付けが一定しない振込みでは竿先が暴れ、結果、ラインが暴れて振り込まれた後の毛ばりは安定しないことになる。すなわち、着水後毛ばりが意図しない動きをし、不自然さが増すこととなる。

●竿の始動

振込みの開始を何処から行うか、私はグリップエンドから行うのが基本的な動作だと考えている。つまり、竿先から始動が開始されるのではないということだ。これは「合

わせ」動作にも関連するものと考え、身に着けた基本動作としていただきたい。
振込み４態
●正面打ち
初心者のうちはこの「正面打ち」を正しくマスターすることで、次の段階へ移行できると考える。
●横打ち
　本来小規模河川では、流れの近くまで障害物（木・壁・岩）があり、振込みを自由にさせてくれないことが多く、必然的に障害物を避ける振り込みを強いられることとなる。
　このときに注意しなければならないことは、振り込んだままだと、どうしても竿の支持点が低い状態になっている。したがって、毛ばりの着水と同じくらいに竿先を持ち上げ穂先部分を高く保っていることが大切だ。
●逆サイド打ち
　左岸しか遡行できないような渓相にあっては有効的な打ち方になるので是非とも習得していただきたいテクニックである。初心者のうちは目標へ入りにくい難しさもあるが、正面打ちの上半身を左に傾ける事で要領が会得できるので少し慣れるとそんなに難しい振込みではないことがお分かりいただけるはずだ。
●クロス打ち
　特に長いラインを振るときに多用する振込み技術である。簡単に説明するなら、斜めに引き上げたラインを正面打ちにて切り返すような振込みである。利点としては、ライン（毛ばり）がスムースに伸びてくれる。
　以上の振込みがマスターできれば、如何なるポジション（位置）からでも目標へ振り込めるので釣り人が優位に立てるということだ。

毛ばりの選択

●普通毛ばり（点の釣り）
　基本的には水面近くにて訴える釣りとなるため、ラインを水中に浸けることは極力少なくし、結果的に「三角形の保持」に重点を置く振込み釣り方になってしまう。保持すると言うことは、ラインが水中に浸かれば自ずと水流に左右されやすく、自分の意図した線を流せなくなり、結果毛ばりも不自然な流れになってしまうことを嫌うからである。
●逆さ毛ばり（線の釣り）
　上記した点の釣りは、主に小規模河川の比較的明解なポイントを狙うのに適し大川のように３次元的なポイントを有するところではこの毛ばりが適している。
●順毛ばり（線の釣り）
　魚の出を予測（予測の釣り）

見釣りと予測の釣り

　毛ばりに魚が反応し、水面近くのハリに魚体むきだしで飛びつくのがテンカラ釣りの醍醐味と思いがちで、誰しもがこれに挑戦するようである。ところで私の経験から言うなら、そんな魚は少なくなったと言う事だ！釣り人がこぞって飛び出させる毛バリを多用したなら「魚もそれ相応に学習して反応しなくなる」と言う考えをするのは私の偏った見かただろうか。

●流れを読む

「予測の釣り」を志すためには、毛バリを就餌する場所をあらかた予見しておく必要があると言う事で、この読みが不適格であればそれなりの成果しか望めない。簡単に言うなら「漏斗の原理」であって、それは餌が集中して集まるところ、またはエリア（勢力圏）の終着点を読むと言うことに他ならない。

勢力圏のなかには必ずボスが存在し、その範囲内において餌なるものを占有しているもので、毛ばりが下流の勢力圏へ入る前に喰いつく場合が多く、この場所を見つけることで「予測の釣り」が簡単になる。

●合わせ

本来「合わせ」とは穂先を数センチ動かせてやれば用が足りるはずで、数１０センチも穂先を動かすような動作自体不必要。余分な動作で済めば良い方で最悪ハリスを切ったり、竿を折るのが落ちとなる。

穂先を数センチ動かすためには手首の関節で合わせを操作するのではなく、腕で合わせを行うように心がけてもらいたい。これは普段の振込みから練習できる習慣だと考え「竿のグリップエンド」から抜き上げるような始動開始を心がける事で習得できる技だと考える。（上記、竿の始動にもつながることでもある）

アプローチ

如何に旨く竿が操作でき、ポイントの見極めが出来たとしても、エリアへの接近が不用意だと肝心の魚を追い散らしてしまうので、疎かにできない基本動作であると考え留意していただきたい。私の言うところの「捨てバリ釣法」も元を正すと「虫が流れてきましたよー」と訴えアピールし、魚の就餌本能を高揚さすのが狙いであることからしても、一匹の魚を追い散らすアプローチは一尾だけに留まらず他の魚にも伝播するものと考え避けなければならない。

また合わせて、常に魚より釣り人のほうが「優位」に働くよう心がけていなければならないと言うのが私の持論であり結論でもある。

★なお、振込みスタイルなど文章で解説しづらいものについては、ビデオ映像を編集しＤＶＤにて仕上げたものを製作中です。

写真撮影掲載協力　井上幹也

無断転用禁ず。なお、ご意見・ご質問等がありましたら、掲示板へどうぞ！